

状況別対人不安と自己呈示の関係

万代 ツルエ

目 的

人前や対人関係の中で感じる様々な不安を対人不安 (social anxiety) とよぶ。本研究で扱う対人不安は、我々が日常生活の中で経験する一般的な情動である。対人不安を説明するモデルは Leary のものが優れている。

Leary (1983) は、対人不安を「現実の、あるいは想像上の対人場面において、他者からの評価に直面したり、もしくはそれを予測することから生じる不安」と定義づけている。また自己呈示理論によって、対人不安を「特定の印象を与えようとする動機づけのレベル」と「個人の望む印象を作れるかどうかの主観的確率」の二変数の積の関数で対人不安を表した。つまり、「他者に特定の印象を与えようとする動機づけられていること」「他者に特定の印象を与えられるか疑わしいこと」という二つの変数のうちいずれか、または両方が高まるときに対人不安が深刻化すると説明している。

対人不安を感じるような状況に遭遇すると、自己の印象を操作しようとする自己呈示の動機づけが高まる。このときの動機づけに大きく関わる要因は自己意識であり、特に自己の外的・対人的側面に注意を向けやすい公的自己意識の高い人は、他者からの評価的フィードバックに敏感であるため、対人不安を感じやすいといわれている。菅原 (1986) は、公的自己意識の強い人は2つの異なった対人的目標を持っているとして、他者から肯定的な評価を得ようとする動機を満たす欲求「賞賛獲得欲求」と、他者から否定的な評価を避けようとする動機を満たす欲求「拒否回避欲求」を概念化した。この2つの欲求は他者に対してそれぞれ異なった社会的イメージの呈示を促すことを示唆している。過去の研究 (例えば佐々木・菅原・丹野、2001) からは、対人不安傾向と賞賛獲得欲求、拒否回避欲求との関連を検討し、拒否回避欲求が強まると対人不安傾向が強くなるのに対し、賞賛獲得欲求が強ま

ると対人不安傾向は抑制されることを明らかにしている。つまり、何を目的に自己呈示するかということが対人不安に重要な意味を持っていることが示され、自己呈示欲求を高める要因を区別せずに列挙している Leary のモデルの限界を示唆している。

一般に自己呈示理論では、不安感の主たる原因は社会的集団から排除され、社会的結びつきが損なわれることへの脅威であるとされており、対人不安は賞賛獲得欲求で示されるような目標よりも拒否回避欲求で示されるような目標によって規定されるといわれている。このことから、賞賛獲得欲求が高い人よりも拒否回避欲求が高い人がより対人不安が高いことが予想される。多くの場合はどちらかを目標に自己呈示するものであるが、どちらの欲求も感じることはあり、これら欲求の交互作用も予想される。また対人状況の違いによっても自己呈示欲求が対人不安に及ぼす影響は違うと思われる。

また対人不安を感じるような状況に遭遇すると、どのような自己呈示が望ましいかを探るため、相手の表出を敏感に認知し解読しようとする。このときの効力感を「解読能力の効力感」と呼ぶ。また、解読した情報に基づいて望ましい自己呈示するため、自己の行動を適切に調節し制御しようとする。このときの効力感を「制御能力の効力感」と呼ぶ。これらは、Lennox と Wolfe (1984) によって、セルフ・モニタリングの能力と概念化された。万代 (2004) では、解読能力の効力感が高い人は制御能力の効力感を高め、その結果対人不安が低くなるという結果を得た。このことから、相手の感情や場の雰囲気や正確に読み取る自信があれば、読み取ったものに合わせて行動を制御していけばいいという自信も持ちやすく、自己呈示の成功が予測される。しかし、どのような自己呈示が効果的か分かったとしても、実際にそのような自己呈示ができる自信がない場合、自己呈示に失敗しやすいことが予測され、その結果生じる相手の否定的な感情や状況だけを読み取ることとなり、対人不安を感じやすくなるだろう。このように考えると、解読能力の効力感と制

御能力の効力感に交互作用がある事が予想される。

また、Wallace & Alden (1995, 1997) は、対人不安の高い人は他者の自分に対する期待を高く見積もりやすいという結果を示し、他者の自分への期待を高く見積もっておくと、失敗しても仕方がないという評価の意味をあいまいにでき、自尊感情が維持できると説明している。これと同様の推論を用いると、自己呈示欲求、特に拒否回避欲求が高い人は他者が自分に高い期待をしており、その期待に応えたくても現実に応える事が難しいと感じやすく、そのために自己呈示の主観的確率を低く見積もりやすくなり、対人不安感が高まると考えられる。

毛利・丹野(2001)は「状況別対人不安尺度」を作成し「発表・発言状況不安」「目上状況不安」「異性状況不安」「親しくない相手状況不安」「会話のない状況不安」の5因子を見出した。本研究でも対人不安の測定にこの5因子を用い、対人不安には自己呈示の各要因がどのように対人不安に関わっているか、また状況によって対人不安の生起過程がどう変わってくるのかを明らかにすることを目的とする。

方 法

<被験者>

調査対象者は女子大学の学生 183 名である。調査時期は 2003 年 8 月で、個人的に依頼して質問紙調査を実施した。

<質問紙>

①自己呈示欲求尺度

菅原(1986)によって作成された尺度で、他者からの評価に対する欲求を測定する。“他者から賞賛されたい(賞賛獲得欲求)”及び“他者から拒否されたくない(拒否回避)”という欲求の強さを反映する。9項目について5件法で評定を求めた。「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらでもない」「ややあてはまらない」「あてはまらない」。

②セルフ・モニタリング改定尺度

Lennox と Wolfe (1984) によって作成され、辻(1988)によって邦訳された尺度で、他者から発せられる「非言語的情報の認知・解読能力」とふさわしい行動を呈示し制御する「自己呈示行動の制御能力」の効力感を測定する。13項目について5件法で評定を求めた。「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらでもない」「ややあてはまらない」「あてはまらない」。

③状況別対人不安尺度

毛利・丹野(2001)によって作成された。対人不安を引き起こす状況を測定する。「発表・発言状況不安」「目上状況不安」「異性状況不安」「親しくない相手状況不安」「会話のない状況不安」の下位尺度からなる。30項目について5件法で評価を求めた(「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらでもない」「ややあてはまらない」「あてはまらない」)。

結 果

自己呈示欲求尺度はその内容により「賞賛獲得欲求」因子と「拒否回避欲求」因子に分け、セルフ・モニタリング尺度はその内容により「非言語的情報の認知・解読能力」因子(以下「解読能力の効力感」と表記)と「自己呈示行動の制御能力」因子(以下「制御能力の効力感」と表記)に分けた。この尺度で測られたものを自己呈示の主観的確率とする。

各状況に対する尺度について、対象者の評定得点を合計した値を各状況の尺度得点とした(Table 1)。

Table 1 各尺度得点

	N	平均値	SD
賞賛獲得欲求	182	17.19	3.52
拒否回避欲求	182	14.99	2.94
解読能力の効力感	182	20.12	3.73
制御能力の効力感	182	21.77	4.04
発表・発言状況不安	182	28.32	6.68
親しくない相手状況不安	182	24.31	6.10
異性状況不安	182	15.27	4.24
目上状況不安	182	11.47	3.71
会話のない状況不安	182	13.38	3.07

自己呈示欲求が状況別対人不安に与える影響

まず、賞賛獲得欲求(2)×拒否回避欲求(2)によって状況別対人不安の程度を分析した。Table 2は各状況における、各群の人数および対人不安得点の平均と標準偏差を示したものである。

分散分析の結果、全ての状況の対人不安において拒否回避欲求の主効果が有意であり(発表・発言状況不安： $F_{(1,178)}=20.34$ 、目上状況不安： $F_{(1,178)}=13.09$ 、異性状況不安： $F_{(1,178)}=4.83$ 、親しくない相手状況不安： $F_{(1,178)}=6.32$ 、会話のない状況不安： $F_{(1,178)}=21.50$)、拒否回避欲求の高い群が低い群に比べて対人不安が有意に高かった。また「発表・発言状況不安」のみ、賞賛獲得欲求の主効果が有意傾向にあり($F_{(1,178)}=3.01$)、賞賛獲得欲求の高い群が低い群に比べて対人不安が高かった。

Table 2 自己呈示欲求の程度による対人不安の程度

賞賛獲得欲求		高 群		低 群		
拒否回避欲求		高群	低群	高群	低群	
		N	57	25	52	48
発表・発言状況不安	平均値	29.37	24.40	30.62	26.63	
	SD	6.78	4.71	6.15	6.59	
目上状況不安	平均値	12.40	9.88	12.08	10.52	
	SD	3.66	3.48	3.38	3.70	
異性状況不安	平均値	15.72	14.08	15.92	14.67	
	SD	4.59	4.12	3.77	4.08	
親しくない相手状況不安	平均値	25.23	22.84	25.29	22.94	
	SD	6.23	5.80	5.63	6.08	
会話のない状況不安	平均値	29.37	24.40	30.62	26.63	
	SD	6.78	4.71	6.15	6.59	

自己呈示の主観的確率が状況別対人不安に与える影響

次に、解読能力の効力感(2)×制御能力の効力感(2)によって状況別対人不安の程度を分析した。Table 3は各状況における、各群の人数および対人不安得点の平均と標準偏差を示したものである。

Table 3 自己呈示の主観的確率の程度による対人不安の程度

解読能力の効力感		高 群		低 群		
制御能力の効力感		高群	低群	高群	低群	
		N	62	26	38	56
発表・発言状況不安	平均値	27.27	31.12	25.47	30.13	
	SD	7.43	6.42	6.03	5.09	
目上状況不安	平均値	10.45	12.89	10.42	12.64	
	SD	4.04	2.98	3.12	3.39	
異性状況不安	平均値	14.31	16.23	14.79	16.23	
	SD	4.77	4.03	3.67	3.69	
親しくない相手状況不安	平均値	22.07	25.58	23.97	26.45	
	SD	6.46	6.15	5.43	5.03	
会話のない状況不安	平均値	12.74	14.12	13.21	13.86	
	SD	3.23	2.58	3.37	2.68	

分散分析の結果、全ての状況の対人不安において制御能力の効力感の主効果が有意であり(発表・発言状況不安： $F_{(1,178)}=17.75$ 、目上状況不安： $F_{(1,178)}=17.29$ 、異性状況不安： $F_{(1,178)}=6.57$ 、親しくない相手状況不安： $F_{(1,178)}=10.57$ 、会話のない状況不安： $F_{(1,178)}=4.44$)、制御能力の効力感の高い群が低い群に比べて対人不安が有意に低かった。

自己呈示欲求と自己呈示の主観的確率が状況別対人不安に与える影響

賞賛獲得欲求(2)×拒否回避欲求(2)×解読能力の

効力感(2)×制御能力の効力感(2)による状況別対人不安の程度を分析したが、各群の人数に大きな偏りがあり、分散分析に不具合が生じたため、上記の分析の結果より重要であった要因を取り上げ、拒否回避欲求(2)×制御能力の効力感(2)によって状況別対人不安の程度を分析した。Table 4は各状況における各群の人数および対人不安得点の平均と標準偏差を示したものである。

Table 4 拒否回避欲求と制御能力の効力感の程度による対人不安の程度

拒否回避欲求		高 群		低 群		
制御能力の効力感		高群	低群	高群	低群	
		N	55	54	45	28
発表・発言状況不安	平均値	27.96	32.02	24.01	27.39	
	SD	7.34	4.74	6.11	5.76	
目上状況不安	平均値	11.42	13.09	9.24	12.00	
	SD	3.79	3.01	3.24	3.61	
異性状況不安	平均値	15.06	16.59	13.80	15.54	
	SD	4.45	3.82	4.21	3.67	
親しくない相手状況不安	平均値	23.60	26.94	21.80	24.68	
	SD	6.04	5.37	6.16	5.23	
会話のない状況不安	平均値	14.09	14.44	11.49	12.96	
	SD	3.07	2.66	2.98	2.35	

分散分析の結果、どちらの分析においても交互作用はみられず、異性状況不安以外の拒否回避欲求の主効果が有意であり(発表・発言状況不安： $F_{(1,178)}=16.32$ 、目上状況不安： $F_{(1,178)}=9.46$ 、親しくない相手状況不安： $F_{(1,178)}=5.15$ 、会話のない状況不安： $F_{(1,178)}=21.56$)、拒否回避欲求が高い群が低い群に比べて対人不安が高く、また全ての状況における制御能力の効力感の主効果が有意であり(発表・発言状況不安： $F_{(1,178)}=11.83$ 、目上状況不安： $F_{(1,178)}=17.41$ 、異性状況不安： $F_{(1,178)}=6.60$ 、親しくない相手状況不安： $F_{(1,178)}=12.07$ 、会話のない状況不安： $F_{(1,178)}=4.33$)、制御能力の高い群が低い群に比べて対人不安が低かった。

それぞれの対人状況不安と各要因の関係を検討するため、状況別対人不安と各要因との相関分析を行った。その結果を Table 5 に示す。

相関分析の結果、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求は有意な正の相関を持ち、解読能力の効力感と制御能力の効力感も有意な正の相関を持った。また全ての状況の対人不安は拒否回避欲求と有意な正の相関を持ち、制御能力と有意な負の相関を持った。親しくない相手状況不安は解読能力の効力感と有意な負の相関を持ち、会話のない状況不安は賞賛獲得欲求と有意な正の相関

Table 5 各要因間の相関

	賞賛獲得 欲求	拒否回避 欲求	解読能力	制御能力	発表・発言 状況不安	目上状況 不安	異性状況 不安	親しくない 相手状況不安
拒否回避欲求	0.28**							
解読能力	0.07	0.01						
制御能力	0.13	-0.14	0.46**					
発表・発言状況不安	-0.09	0.37**	-0.04	-0.30**				
目上状況不安	0.03	0.32**	-0.11	-0.26**	0.59**			
異性状況不安	-0.02	0.29**	-0.11	-0.28**	0.60**	0.59**		
親しくない相手状況不安	-0.04	0.26**	-0.21**	-0.31**	0.45**	0.63**	0.65**	
会話のない状況不安	0.18*	0.45**	-0.03	-0.20**	0.44**	0.47**	0.53**	0.55**

*p<.05 **p<.01

Table 6 状況別対人不安と各要因における重回帰分析

目的変数	R ²	説明変数	β
発表・発言状況不安	0.22	拒否回避欲求	0.39**
		制御能力の効力感	-0.22**
		賞賛獲得欲求	-0.16*
目上状況不安	0.15	拒否回避欲求	0.29**
		制御能力の効力感	-0.22**
異性状況不安	0.37	拒否回避欲求	0.25**
		制御能力の効力感	-0.24**
親しくない相手状況不安	0.14	制御能力の効力感	-0.28**
		拒否回避欲求	0.22**
会話のない状況不安	0.22	拒否回避欲求	0.43**
		制御能力の効力感	-0.13*

説明変数はステップワイズ法で選択された順に記載

*p<.05 **p<.01

を持った。さらに、各対人不安間は全て高い正の相関を持った。

さらに、状況別対人不安を目的変数、各要因を説明変数とした重回帰分析を行った。その結果を Table 6 に示す。

発表・発言状況不安は第一に拒否回避欲求から正の影響、次に制御能力の効力感から負の影響、賞賛獲得欲求から負の影響を受ける。また相関分析より、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求間の相関の強さにも影響を受けているといえる。目上状況不安は第一に拒否回避欲求から正の影響、次に制御能力の効力感から負の影響を受ける。異性状況不安も第一に拒否回避欲求から正の影響、次に制御能力の効力感から負の影響を受ける。親しくない相手状況不安は第一に制御能力の効力感から負の影響、次に拒否回避欲求から正の影響を受ける。また相関分析より、解読能力の効力感と制御能力の効力感の効力感間の相関の強さにも影響を受けているといえる。会話のない状況不安は他のどの状況よりも拒否回避欲求から大きな正の影響を受け、次に制御能力の効力感の負の影響を受ける。また相関分析より、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求間の相関の強さにも

Table 7 状況別対人不安と全要因における重回帰分析

目的変数	R ²	説明変数	β
発表・発言状況不安	0.50	異性状況不安	0.35**
		目上状況不安	0.33**
		拒否回避欲求	0.21**
		賞賛獲得欲求	-0.14*
目上状況不安	0.52	親しくない相手状況不安	0.45**
		発表・発言状況不安	0.39**
異性状況不安	0.56	親しくない相手状況不安	0.41**
		発表・発言状況不安	0.35**
		会話のない状況不安	0.16*
親しくない相手状況不安	0.57	異性状況不安	0.33**
		目上状況不安	0.32**
		会話のない状況不安	0.22**
		解読能力の効力感	-0.14*
会話のない状況不安	0.45	親しくない相手状況不安	0.33**
		拒否回避欲求	0.26**
		異性状況不安	0.25*
		賞賛獲得欲求	0.13*

説明変数はステップワイズ法で選択された順に記載

*p<.05 **p<.01

影響を受けているといえる。

相関分析と比較すると、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求の関係の強さや解読能力の効力感と制御能力の効力感の関係の強さが影響を及ぼしているといえる。また対人不安間の相関の強さは、お互いが影響を与え合っているための相関の高さとも考えられ、対人不安間の関係を明確にするため、状況別対人不安を目的変数に、全ての要因を説明変数とした重回帰分析を行った。その結果を Table 7 に示す。

発表・発言状況不安は第一に異性状況不安から正の影響を受け、次に目上状況不安から正の影響を受け、次に拒否回避欲求から正の影響を受け、次に賞賛獲得欲求から負の影響を受ける。目上状況不安は第一に親しくない相手状況不安から正の影響を受け、次に発表・発言状況不安から正の影響を受ける。異性状況不安は第一に親しくない相手状況不安から正の影響を受け、次に発表・発言状況不安から正の影響を受け、次に

に会話のない状況不安から正の影響を受ける。親しくない相手状況不安は第一に異性状況不安から正の影響を受け、次に目上状況不安から正の影響を受け、次に会話のない状況不安から正の影響を受け、次に解読能力の効力感から負の影響を受ける。会話のない状況不安は第一に親しくない相手状況不安から正の影響を受け、次に拒否回避欲求から正の影響を受け、次に異性状況不安から正の影響を受け、次に賞賛獲得欲求から正の影響を受ける。

考 察

本研究では、自己呈示理論による対人不安へのアプローチにおいて、自己呈示欲求を「賞賛獲得欲求」と「拒否回避欲求」の二側面から、また自己呈示の主観的確率をセルフ・モニタリングの「解読能力の効力感」と「制御能力の効力感」の二側面から5つの対人状況で検討した。その結果、全ての状況の対人不安は拒否回避欲求が高く、制御能力の効力感が低い時に高くなることが明らかにされた。

対人不安に影響を及ぼす自己呈示欲求と自己呈示の主観的確率の各要因は区別でき、どの状況においても対人不安感は概ね同じ要因で決定されるといえる。しかし、対人状況による違いも明らかにされた。

〈発表・発言状況不安〉

人前で発表したり、会議等で発言したりするような状況では、拒否回避欲求が高く制御能力の効力感が低いと対人不安が高まるだけでなく、賞賛獲得欲求が低いことでも対人不安が高まる事が明らかになった。この状況での賞賛獲得欲求と拒否回避欲求はその影響を打ち消しあう関係にあることも示された。このことから、この状況におかれた時には、賞賛獲得欲求を強く感じるか、拒否回避欲求を強く感じるかどうかであると考えられる。拒否回避欲求が高い人が他者の自分への期待を高く見積もり、期待に応えたくても応えられないと感じやすく、そのために自己呈示の主観的確率を低く見積もりやすくなり、対人不安感が高まると考えるならば、賞賛獲得欲求の高い人は、自己呈示の目標と他者の期待を自分の実力に見合ったところで見積もり、そのため制御能力の効力感が高くなり、対人不安が低くなるのではないかと考えられる。

また、異性状況で感じる不安感と目上状況で感じる不安感に似ている対人不安である。拒否回避欲求が高いことと賞賛獲得欲求が低いことによって感じる対人不安であり、相手に対してどれだけ自己をアピールで

きるかどうかに対する不安感であると考えられる。

〈目上状況不安〉

自分よりも立場が上の人と同じ場に居合わせるような状況では、拒否回避欲求が高く制御能力の効力感が低いと対人不安が高まるが、賞賛獲得欲求と解読能力の効力感是对人不安に影響しない要因であった。小島・太田・菅原（2003）は、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求の強さにより、評価的フィードバックに対して異なる情緒反応が見られることを明らかにしており、拒否回避欲求が強いと恥やテレを感じやすく、賞賛獲得欲求が強いと怒りや満足を感じやすいと述べている。これと同じように考えると、この状況で賞賛獲得欲求が強いと、対人不安ではなく他の感情を感じる可能性があるため、今後の検討が必要である。

また、親しくない相手状況で感じる不安感と発表・発言状況で感じる不安感に似ている対人不安である。あまりよく知らない目上の相手に対して、うまく自己をアピールできるかどうかに対する不安感であると考えられる。

〈異性状況不安〉

異性とと同じ場に居合わせるような状況でも、拒否回避欲求が高く制御能力の効力感が低いと対人不安が高まるが、賞賛獲得欲求と解読能力の効力感是对人不安に影響しない要因であった。拒否回避欲求と制御能力の効力感是对人不安に与える影響は同程度である。このような状況では積極的な行動や経験の多さが重要であると思われる。制御能力の効力感が高いと積極的な行動や経験は増えるであろう。しかし、拒否回避欲求が強いと積極的な行動は減少し、あまり目立たないように努めるだろう。このように考えると、この状況でのこの二つの要因は表裏一体の関係にあると考えられる。また上記と同様に、賞賛獲得欲求が強いと他の感情を感じる可能性があるため、今後の検討が必要である。

また、親しくない相手状況で感じる不安感と、発表・発言状況で感じる不安感と、会話のない状況で感じる不安感に似ている。あまりよく知らない異性の相手に対して、会話を続け、うまく自己をアピールできるかどうかに対する不安感であると考えられる。

〈親しくない相手状況不安〉

初対面の人やあまり親しくない相手状況不安人と同じ場に居合わせる状況では、拒否回避欲求が高く制御能力の効力感が低いと対人不安が高まる。賞賛獲得欲求は対人不安に影響しない要因であった。また、解読能力の効力感是对人不安と関係が強く、制御の効力感

の影響を受けて対人不安に影響する事が示された。この状況では、相手についての情報は最低限のものであり、どのような自己呈示をすればよいかは、相手との相互作用の中で探り行動を決めていかなくては行けない。つまり、相手の感情や場の雰囲気を読み取る自信が高ければ行動を制御する自信も高くなるといえる。

また、異性状況での不安感と目上状況での不安感と会話のない状況での不安感に似ており、解読能力の効力感の低さに影響を受けて感じる対人不安である。異性や目上を含むよく知らない人と、会話が続くかどうかに対する不安感であり、相手の状況を把握できるかどうか重要であると考えられる。

〈会話のない状況不安〉

会話の中で自分だけがついていけない話題になったり、会話が途切れがちになったりする状況では、拒否回避欲求が高く制御能力の効力感が低いと対人不安が高まるが、より拒否回避欲求が対人不安に影響を与える。また、賞賛獲得欲求も拒否回避欲求と関係が強く、拒否回避欲求に影響を受けて対人不安に影響を与えることが示された。会話についていけないことはその集団から排除される可能性もあり、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求は同じような意味を持つといえる。また、このような状況では気まずさを感じやすく、相手への過剰な配慮も起こりやすいと思われる。このため、自己と「場」との不調和がないかを判断しようとしてより自己意識が高まりやすく、何を目標にするか自己呈示欲求の区別はないと考えられる。

また、親しくない相手状況で感じる不安感と異性状況で感じる不安感に似ており、拒否回避欲求と賞賛獲得欲求の高さに影響を受けて感じる対人不安である。あまりよく知らない人や異性との会話においてその集団から拒否されないかどうかに対する不安感であり、発表・発言状況での不安感とは異質なものと考えられる。

自己呈示欲求の解読能力の効力感への影響および自己呈示の主観的確率の交互作用は見られず、解読能力の効力感が高いことで対人不安が高くなるだろうという仮説は支持されなかった。また、親しくない相手状況不安以外の状況では対人不安との関係はみられなかった。Lennox & Wolf (1984)によると、セルフ・モニタリング改定尺度の作成過程で、Snyderの尺度に含まれる、どのような行動が社会的に適切に注意を向けることを測る尺度が対人不安と正の相関を持つことを批判し、それを削除して、純粋なセルフ・モニタ

リングを測るための限られた概念に基づいた因子を考案した。それが解読能力の効力感であり、解読能力の効力感の制御能力の効力感を高めるための要因でもある。対人不安とは関係を持たないように作成された。そのため、どのような自己呈示が効果的か分かっていても、実際にそのような自己呈示ができる自信がない場合というのは前提として考えられていないといえる。しかし、長谷川(1993)は「日本人の自己監督(セルフ・モニタリング)とは、自己自身の姿を「場」との調和において眺めているという構造のことであり、自己と「場」との不調和がないかどうかを的確に判断し、もし不調和があれば、自分自身を改善することによってそれを取り除くことである」と述べている。この前提には拒否回避欲求があると考えられ、拒否回避欲求が高い人は、自己が「場」に調和するために状況を把握しようとするであろうし、どのような自己呈示が効果的か分かったとしても、実際にそのような自己呈示ができる自信がない場合もありうるだろうと思われる。そのような「自己と「場」との不調和がないかどうかを判断する」程度を測定するには、セルフ・モニタリング改定尺度の「解読能力の効力感」では不適當であったと思われる。今後は、自己と「場」との不調和がないかどうかを判断する程度を別の尺度で捉えていく必要がある。

引用文献

- 長谷川美千子 1993 自己のかたち—罪の文化と恥の文化 濱口恵俊(編) 日本型モデルとは何か—国際化時代におけるメリットとデメリット 新曜社
- 小島弥生・太田恵子・菅原健介 2003 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み 性格心理学研究 11(2) 86-98
- 毛利伊吹・丹野義彦 2001 状況別対人不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 健康心理学研究 14(1) 23-31
- Leary, M. R. 1983 Social Anxiousness: The Construct and Its Measurement *Journal of Personality Assessment* 47(1) 66-75
- Leary, M. R. 1983 SOCIAL ANXIETY Social, Personality, and Clinical Perspectives 生和秀敏(監訳) 1990 対人不安 北大路書房
- Lennox, R. D & Wolfe, R. N 1984 Revision of the Self-Monitoring Scale *Journal of Personality and Social Psychology* 46(6) 1349-1364
- 万代ツルエ 2004 対人状況の違いによる自己呈示と対人不安の関係—女子青年の場合— 甲南女子大学大学院論集第2号 人間科学研究編
- 佐々木淳・菅原健介・丹野義彦 2001 対人不安における自己呈示欲求について—賞賛獲得欲求と拒否回避欲

- 求との比較から 性格心理学研究 9(2) 142-143
- 菅原健介 1986 称賛されたい欲求と拒否されたくない
欲求—公的・自己意識の強い人に見られる2つの欲求に
ついて 心理学研究 57 134-140
- 辻平治郎 1988 セルフ・モニタリング尺度の因子構造
と自己呈示理論の提案 甲南女子大学人間科学年報
13 51-65
- Wallace, S. T. & Alden, L. E 1995 Social Anxiety and Stan-
dard Setting Following Social Success or Failure *Cognitive
Therapy and Reserch* 19(6) 613-631
- Wallace, S. T. & Alden, L. E 1997 Social Phobia and Positive
Social Events : The Price of Success *Journal of Abnormal
Psychology* 106(3) 416-429